松村通信第８２号

2014 年 12 月 19 日
松村勝弘

日本人のこころ

『死ぬ前に語られる後悔』トップ5　少し前に「ナースが聞いた『死ぬ前に語られる後悔』トップ５！」というのがアップされていた。the guardian からのものが翻訳されてアップされていた。いわく、

「もし今日が人生最後の日だったら
あなたは後悔を口にしますか？

それはどのようなものですか？

人生最後の時を過ごす患者たちの
緩和ケアに数年携わった
オーストラリアの Bronnie Ware さん。

彼女によると
死の間際に人間はしっかり人生を
振り返るのだそうです。

また、患者たちが語る後悔には
同じものがとても多いということですが
特に死を間近に控えた人々が口にした
後悔の中で多かったものトップ５は
以下のようになるそうです。」

このトップ５が紹介されていた。すなわち

1. 自分自身に忠実に生きれば良かった
2. あんなに一生懸命働かなくても良かった
3. もっと自分の気持ちを表す勇気を持てば良かった
4. 友人関係を続けていれば良かった
5. 自分をもっと幸せにしてあげればよかった

私は、これを読んで違和感を感じざるをえなかった。まず死に際に私はこうは思わないだろうと思うからだ。それだけではない。多くの日本人はこういう後悔をしないだろうと思うからだ。

この後悔は西欧人が感じる後悔ではないだろうか。個人主義、自己の確立の必要性が固く信じられている。ここでは自己主張が必要だと信じられている。西欧人はその必要性を教えられ、その中で育てられる。しかし、人間が社会生活を営む上で、そのような自己主張一点張りでは、世の中うまくまわらない。だから、妥協も必要になる。西欧人はそのような妥協に後ろめたさを感じるのだろう。だから、死ぬ間際になって「後悔」するのだろう。

日本人は大人である　東洋人、日本人はそんな育てられ方をしない。日本人は「和を以て尊しとなす」と教えられている。よく日本的経営は、日本人は、集団主義だと言われ、個人主義と対比され、それだから西欧先進国と比べて「遅れている」とも言われる。日本的経営論では、却ってそれがよかったとも評価されている。でも、そんな単純なものではないと、私は思う。

東洋の文化的伝統を振り返ってみる必要があると思う。西洋では観念論でも唯物論でも自分を中心にものごとを考える。「我思う、ゆえに我あり」（17 世紀近世哲学の祖デカルト）から出発する西欧近代は、今日の個人主義に行き着いたのではなかろうか。これに対して、日本の代表的哲学者西田幾多郎は全く別の主張をしている。

「純粋経験こそが本質（実在）だとする西田の観点にたてば、『私』という『主体』は後づけで反省的に打ち出されるもので、純粋経験のうちにはない。西洋の科学が前提にしている『主体』や『客体』というものは、いわば仮構されたものであって、それを前提に思考を始めるわけにはいかないのです。

むしろ、この強烈な経験があるからこそ、そこから『私』が押しだされてきたというべきでしょう。『私』が『経験』するのではなく、『経験』が『私』を生みだすのです。経験があるからこそ、それを反省的に理解して、そこに『私』がでてくるわけです。『個人あって経験あるのではなく、経験あって個人あるのである』（『善の研究』）というわけです。」（佐伯啓思『西田幾多郎　無私の思想と日本人』新潮新書、2014 年、56-57 頁）

西田哲学はしばしば「無の哲学」だと言われる。これはまた般若心経の「色即是空、空即是色」に通ずる。これを人間の生き方に敷衍したのが親鸞ではなかったか。自分を無にしないと「利他」の心は出てこないだろう。まず自分ありきの西欧とは全く違う。

初めから自分を無にすることができる日本人は「妥協」して人と接しているのではなく、自己主張が通らないのは当たり前だと思っている。世の中、みんながみんな勝手な自己主張をしていたら、社会が成り立たないのは当たり前。そんなことは日本人なら誰でも知っている。日本人は妥協でも何でもなく、当たり前のこととして現実を受け止めている。その現実を出発点にして、どう生きていくのがよいのか、常に考えて生きている。まさに日本人は「大人」である。だから、死ぬ間際になって後悔する必要もない。その意味では、日本人は極めて現実的なのである。

自分の考えた理論・理念に苦しむ西欧　純粋経験、無、空を考える東洋哲学、日本哲学の

対極に西欧哲学があり、これに裏付けられた西欧的諸科学がある。経済学、新古典派経済学もそうだ。そこでは、理論・法則（それも人が考え出したものに過ぎないが）が先にある。マルクス主義では具体的現実を抽象化して理論が組み立てられている、と言っているが、それはあくまでも、マルクスという「人」が考えて、組み立てたものに過ぎない。経済学に出てくる「人」は、「合理的経済人」（新古典派経済学）、「範疇的資本家」（マルクス経済学）、つまり頭の中で組み立てられた「人」であり、現実に生きている人ではない。

「しかし、この無国籍的で、無味無臭で、蒸留水のように純化された抽象的な『私＝精神』が自立して初めて科学も科学技術も成立するのです。この『私』は、いっさいの経験を信じず、論理だけにたよって、この世界を理解しようとします。具体的で経験的な現実ではなく、論理的に構成されたものだけが真の世界なのであり、この論理的構築物はきわめて普遍的なものとなるでしょう。」（佐伯、前掲書、53 頁）

「実際には『エセ法則』だったのですが、マルクス主義は、『歴史法則』などといいだして、革命は必然だといったのです。人間が自分の都合のよいように、社会を変えることができる。この場合に、現実より理念や法則の方が『合理的』なのです。」（佐伯、前掲書、54 頁）

抽象理論から出発した無茶な構造改革　何とばかげた考えか。現実から出発すれば、そんな「合理性」など糞食らえ、だろう。でも、その理念を押しつけてくるのが西欧諸国である。それも、少しは大人のヨーロッパではなく、人間的に成熟していないアメリカである。もちろんアメリカ人にも多くの大人はいる。でも政治家や学者、メディアは、より子供っぽい。それで、自分で自分の首を絞めることになる。もちろん日本人でもアメリカ留学帰りにそのような「子供」がいる。日本の現実がアメリカの理論と合っていなかったら、日本の現実が誤っていると主張する「学者先生」など、その典型だろう。日本をアメリカ型に改造しなければならないとのたまう。構造改革だ、「聖域なき構造改革」だなどという無茶を言う。ただ、日本の学者先生も「かれらは新しく受けいれたものを尊重するあまり、自国の伝統的なものを捨てようとする傾向がある。そうしてこの態度そのものが、日本民族にとっては伝統的だとさえいわれている。日本民族は優れた文化に対してきわめて鋭敏な感受性をもつとともに、このように感受したものにたいし、自己を空しうして学び取るという謙虚な態度をたもっている。」（中村元『日本人の思惟方法＜普及版＞』春秋社、2012 年、152 頁）学者先生もそのかぎりで日本的なのである。

「論理的構築物はきわめて普遍的なもの」に見えるからたちが悪い。こういう人たちは、現実から出発しない。日本の現実から出発して、日本経済の改善をするという発想がない。政治家、学者、メディアにそれが多い。経営者はさすがに現実を考えている。一部経済団体の長になったような経営者は時々無茶を言うが。

企業経営は生身の人間・顧客が相手　企業経営者は生身の人間・顧客を相手にしているのだから、空理空論を振りまわすわけにはいかない。「論理的構築物はきわめて普遍的なもの」だからといって、日本人でもアメリカ人でもない「人間一般」がこの世の中に存在するわけがない。

「日本企業の持つサービスの強みは『おもてなし』にある」（若林直樹「経済教室・サービスの本質、研究進む」『日本経済新聞』2014 年 12 月 16 日号）という。「おもてなし」というはやり言葉を使わなくても、日本企業が顧客満足を中心に据えていることは周知の所であろう。上記「経済教室」でも述べられているが、顧客満足をもたらす会社では従業員満足も高いという。従業員満足があってこその顧客満足であろう。これは多くの経営者の言うところでもある。それが日本企業の「集団主義」のなせるところだというのでは筋が通らない。先に述べたように、日本人は自分を無にすることができる。それを少しも怪しまない。

だからこのように言われる。「『おもてなし』の語源のひとつは、『表も裏もない』ということだそうで、『表も裏もないまっ正直で純粋な気持ち』ということのようです。わざわざことあげするようなものではないのです。／これは『おもてなし』に限らず、日本文化の様々な局面にまで根を張っていて、われわれはしばしば『こころから……する』というようなことをいう。この『こころ』は、決して表に現わすのではなく、むしろ、『私』を消し去って相手に寄り添うのです。」（佐伯、前掲書、163-4 頁）

利他主義という言葉もなお生き残っている。「我（われ）が我（われ）が」の西欧的個人主義ではない。ここに日本企業の強みがある。「おもてなし」が自然と行われるところに、日本企業の強みがある。もちろん、戦後日本、さらには、新古典派経済学、市場主義万能が跋扈した 2000 年代以降の日本企業では、その本来の強みが失われつつあるかもしれない。でも、根っこのところではなお日本文化は根強いものがあると思う。

ＨＰ、ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP（http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。